

北海道の名付け親「松浦武四郎」

一般社団法人 建設コンサルタンツ協会 参与・企画部長
(前一般社団法人 全日本建設技術協会 参事)

か もと
加本 実

昨年、6月から10月の末まで全建に勤務する機会を得た。この間、地方協会の総会、技術講習会、品確更新講習会、品確試験などで、日本各地を多く訪ねた。非常に目まぐるしかったが、得難い経験であり、幾人かの足跡に触れることができた。松浦武四郎(1818~1888)もその一人である。武四郎が北海道を命名して150年たったとのことで、武四郎を紹介する150周年のイベントがなされていた。土木学会でも明治150年とこのことで日本の発展の基になった、事物をさかのぼって、将来を考えていく試みがなされているが、明治以降の北海道を語る際にアイヌの人に寄り添った武四郎に触れられることは少ない。そのことから、月刊「建設」の読者の皆さんにぜひ、武四郎を知っていただければと思いこの文章を書くに至った。

松浦武四郎の名を最初に知ったのは、当時のJACIC(日本建設情報総合センター)技術顧問になられた月尾嘉男さんによる。東大教授を定年退職され、カヤックで全国の川巡りなど本格的な冒険をされ始めていたころである。テレビやラジオでも松浦武四郎のことを盛んに語っておられた。加藤秀俊さんの「メディアの展開」では、江戸と明治はつながっているとの主旨で、秋田で活躍した管江真澄など様々な江戸時代の人物が紹介されており、蝦夷地探検家の一人として武四郎のことにも触れられてい

る。真澄・武四郎の2人とも絵がうまく、それらの絵は、現代の記録写真に相当する。

以下は山本命著、松浦武四郎入門からの引用である。「明治二年(1869)7月に政府は開拓使を設置。武四郎は開拓判官(長官、次官に次ぐ重要ポスト)に任じられている。開拓政策を進めるにあたり、武四郎は蝦夷地に替わる新名称を政府へ提案した。「北海道々名撰定上申書」には、日高見道(ひたかみどう)、北加伊道(ほっかいどう)、海北道、海島道、東北道、千島道の六案を挙げ、蝦夷とは古代の、「荒蝦夷」、「熟(にぎ)蝦夷」、「都加留(つがる)蝦夷」、つまり朝廷に従わなかった集団のことで、地名ではないとして六案それぞれの理由を記している。その中の「北加伊道」について、「東国で暮らす人びとは自らの国を加伊と呼ぶ」ことが「参考熱田大神縁起」の頭書に記されており、「アイヌは互いにカイノーと呼び合う」としている。日本の北にあるアイヌの人びとが暮らす大地という思いを込めたこの「北加伊道」が「北海道」に字を改めて採用された。上申書に北海道と書かなかったのは、明治以前から北の海の世捨て人という意味で自らの雅号に「北海道人」を用いていたため、同じ文字を使うのはおこがましいと内部から批判や反発が出ることを考慮してのことだ。<中略>武四郎が提案したのは道名だけではない。国名(のちの支庁名、現在の振興局名)、

群名も、道名案とともに政府へ上申。地名はその土地の文化・歴史であるという立場でアイヌ語地名に基づき検討し、アイヌの人々が古くから暮らしてきた大地である証を残そうとした。」

松浦武四郎は、文化15年（1818）に、雲出川の右岸、伊勢国一志郡須川村（現在の三重県松阪市小野江町）の伊勢街道筋に庄屋の四男として生まれる。因みに雲出川を挟んで対岸の津市高茶屋には、あずきアイスで有名な井村屋本社がある。武四郎の生家は見学でき、そこで聞いた話では、地元では最近まで知る人は少なかったそうだ。故郷に帰って住むことは無かったし、お金を持ち出し江戸へ放浪したり、借金の支払いをたびたび実家に頼んだり、不義理もあったようである。昔は次男以下のものは、人生の模索が激しかったのだろうと想像する。津の、石水美術館では、川喜田石水が、松浦武四郎と同世代の友人であり、終生支援していたことを知った。川喜田家は、すでに江戸時代に伊勢商人の豪商であり、のちに百五銀行を創設している。頭取で陶芸家でもあった川喜田半^{はん}泥子やKJ法の川喜田次郎といった著名人を出している。

北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）に展示されている「東西蝦夷山川地理取調図、安政6年（1857）」は見る人を感動させる。図の説明には次のとおりある。「この地図は、松浦武四郎が幕府の命令で安政4年（1857）から3年がかりでつくりあげたものです。経緯1度を一枚とした26枚の地図をあわせたものです。島の形は伊能忠敬、間宮林蔵、近藤重蔵等の測量の成果を取り入れ、そのなかに山脈、河川、湖沼、地名、集落、道路など内陸の状況を詳細に書き込んである。武四郎の長年の超人的な調査測量探検の成果をしのばせ、近世地図作成史上の一大傑作です。」伊能忠敬の地図には日本の輪郭、海岸線が中心で内陸は空白な印象が否めないが、多くの山川をアイヌの人と巡り調査した武四郎のこの北海道地図のち密さと地名の多さに、先人の資産を基に

して知見が深まっていくことの力強さを感じる。

「聞いた音そのままをカタカナで表した9800に及ぶアイヌ語地名からは、この土地に暮らしてきた人々の歴史と文化が感じられ、決して未開の地でないことが分かる」（山本命著、松浦武四郎入門）

武四郎が神田五軒町の自宅の庭へ張り出す形で1886年に増築した一畳敷の書齋が、野川に近い東京都三鷹市の国際基督教大学（ICU）の敷地内にある実業家・山田敬亮の別荘「泰山荘」の茶室に移築されている。国分寺崖線上にある泰山荘にはICUの学園祭時の公開時に見学することができた。松浦家から紀州徳川家（徳川頼倫）、日産自動車重役（山田敬亮）、中島飛行機社長（中島知久平）へと所有者が移り、現在、ICUに引き継がれている。天井板や棚板、柱など、そのあらゆる部材には、晩年の旅の舞台となった西日本を中心とする友人・知人60名以上から提供された。

現在の三鷹や国分寺、小平などのJR中央線沿線に住まう多くの家族は、祖父母が地方から出てきた世代で、孫の世代は、もはや田舎を持たなくなってきているようである。そこに、武四郎の故郷との関係よりもますます薄くなってきている地方と東京との関係性を感じた。

武四郎は、晩年まで探検家魂を持ち続け、終焉の地を求めたかのように、68歳から亡くなるまで、十津川の源流域である大台ヶ原探検を行っている。

<参考文献>

- 月尾義男、月尾嘉男の洞窟（北海道二十一世紀）
http://www.tsukio.com/essay_kensetsu00.html
- 加藤秀俊、メディアの展開、2015
- 山本命、松浦武四郎入門：幕末の冒険家、2018
- 北海道150年事業、幕末維新を生きた旅の巨人・松浦武四郎、2018
- ヘンリー・スミス、泰山荘—松浦武四郎の一畳敷の世界、国際基督教大学博物館、1993
- 松浦武四郎原著、更科源蔵・吉田豊訳、アイヌ人物誌、2018